

小学校「生活科」と保育領域「環境」の連携に関する研究 ～ICTの活用を軸として～

村 山 大 樹 (文教大学教育研究所客員研究員)

Research on Linking of 'Life Environmental Studies' in Elementary Schools with 'Environmental Studies' in Nursery Education : On Basis of Utilization of ICT

MURAYAMA TAIKI

(Guest Researcher of Institute of Education, Bunkyo University)

要 旨

幼児教育と小学校教育の接続を考える上で、小学校「生活科」の役割がますます重要視されている。

本研究では、保幼小連携の観点から、小学校「生活科」と保育領域「環境」の内容に焦点を当て、その連携を目指したICTを活用した活動について検討を行った。

その結果、小学校「生活科」と保育領域「環境」には、その扱う内容や学習方法に親和性があり、両者をつなぐツールとしてICT（タブレット端末）の活用可能性を見出すことができた。

1. はじめに

近年、幼児教育と小学校教育の接続が重要視されている。文部科学省は、平成28年8月に「幼児教育部会における審議の取りまとめについて（報告）（以下：「幼児教育部会取りまとめ」と称す）」¹⁾を公表した。そこでは、現行の幼稚園教育要領等の成果と課題を踏まえ、これからの幼児教育の目指す方向性ととも、幼児教育と小学校教育の接続の観点から、小学校「生活科」を中心とした接続の在り方も示されている。

小学校「生活科」は元々、その内容や子どもが多様な体験を重視する学習方法から、幼児教育と親和性の高い教科と言われてきた。これからの保幼小連携を考えていく際にも、核となる教科として位置付けられている。

幼児教育は、幼稚園教育要領等に示される5つの保育領域（健康、人間関係、環境、言葉、表現）の内容に沿って行われる。保幼小連携のためには、これら各領域と小学校の各

教科との接続を考慮する必要がある。その中でも、特に保育領域「環境」は子どもの身近な環境にアプローチしていくという点で、小学校「生活科」となじみの深い領域であると捉えられる。幼児教育と小学校教育において、共通の教材や題材を用いた活動を計画する等、保幼小連携の具体的な在り方についての研究が必要とされている。

筆者らはこれまで、幼稚園、保育園、小学校、中学校においてICTの可能性について実践を通して検証し、その有用性を追究してきた^{2~4)}。

本研究では、これまでの実践から得た成果を踏まえつつ、保幼小連携の観点から、小学校「生活科」と保育領域「環境」の接続を目指したICTの活用方法について検討することとする。

2. 保幼小連携の必要性

(1) これからの幼児教育に求められる視点

平成17年度に中央教育審議会（以下「中教審」と略す）より示された「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申）」⁵⁾では、第1章の幼児教育の意義及び役割において、「幼児は、身体感覚を伴う多様な活動を経験することによって、豊かな感性を養うとともに、生涯にわたる学習意欲や学習態度の基礎となる好奇心や探究心を培い、また、小学校以降における教科の内容について実感を伴って深く理解できることにつながる『学習の芽生え』を育んでいる」とし、いわゆる早期教育とは本質的に異なることにも言及しながら、幼児教育が生涯にわたる人間形成の基礎を培う普遍的かつ重要な役割を担っていることが述べられている。

前述の幼児教育部会取りまとめの「幼稚園教育要領の改善イメージ」においても、幼稚園教育を通じて育成すべき資質・能力と初等中等教育（幼・小・中・高）を通じて育成すべき資質・能力との関係や、幼稚園と小学校との接続など、小学校教育との接続が意識された文言が追加されていることがわかる。

さらに現在、保育の質を高めることが目指されている。なかでも、非認知能力はこれからの幼児教育のキーワードであり、「学びに向かう力」とも言い換えられている。OECDでもその育成について検討が進められている⁶⁾など、乳幼児期から児童期にかけて、知的なスキルとともに学習意欲や努力などの社会情動的スキル、非認知能力を育てることが、将来の子どもたちの成長を助けることにつながるとして、これらの能力を育てることが国際的に注目されているところである。

これからの社会を生きる人材を育てるためには、0歳から5歳までの幼児期の段階から社会情動的スキルを育てていくことが必要であり、日本ではそれらを「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」⁷⁾を手掛かりに「自立心」「協同性」

「道徳性・規範意識の芽生え」といった、「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」として具体的な形で提示している。こうした能力の育成には、学習環境の一貫性が重要であり、小学校とのつながりを意識し、子どもの発達連続性を踏まえた幼児教育を推進することが求められている。

（2）保育者の専門性

知識基盤社会、グローバル化といった変化の激しい社会の中で、幼児期から高等教育にかけて知・徳・体のバランスの取れた「生きる力」をより効果的に育成することが求められている。そうした中で、平成27年4月に「子ども・子育て支援新制度」⁸⁾が施行された。そこでは、幼児期の教育は生涯に渡る人格形成の基礎を培う重要なものであり、全ての子どもに質の高い幼児教育を保障することが目指されている。核家族化の進展、地域のつながりの希薄化、共働き家庭の増加、兄弟姉妹の数の減少など、子育て家庭や子どもの育ちをめぐる環境が大きく変化している中で、幼児教育を通して子どもたちが適切な環境の下で自立し、他者と協働しながら創造的に生きていくために必要な能力を身につけることが求められている。また、子どもや子育て家庭の置かれた状況や地域の実情を踏まえ、国や地域を挙げて、子ども・子育てへの支援を強化する必要があると指摘されている。

そもそも幼児教育では、幼児の主体的な活動としての遊びを中心とした教育を実践するため、保育者がそれに必要な環境構成をすることが求められている。幼児教育部会取りまとめにおいても「教師は幼児のモデルとして様々な役割を果たしており、与える影響も極めて大きい」と指摘されているように、質の高い保育者の養成も緊要の課題とされている。

認定こども園をはじめとした教育と保育の一体化の観点からすれば、0歳からの発達を見越し、幼稚園教諭および保育士資格の両方

を所持し、保育のプロとしての資質・能力、技能を兼ね備えた保育者の養成がこれからの時代には求められる。

平成14年の文部科学省協力者会議報告「幼稚園教員の資質向上について」⁹⁾や、前述の中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」における提言とともに、「幼児教育振興アクションプログラム（平成18年度～22年度）」¹⁰⁾において、幼稚園教諭免許と保育士資格の併有率の目標値設定を求めたことなどにより、免許併有を促進できたとされているが、保幼小の接続についてはこれからの課題として指摘されている。

「幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続に関するアンケート調査」（平成21年文部科学省）¹¹⁾によると、幼小接続については、ほとんどの地方公共団体で幼小接続の重要性を認識している（都道府県100%、市町村99%）が、その一方で、幼小接続の取り組みは十分実施されているとはいえない状況（都道府県77%、市町村80%が未実施）にある。その理由としては、「接続関係を具体的にすることが難しい」（52%）、「幼少の教育の違いについて十分理解・意識していない」（34%）、「接続した教育課程の編成に積極的ではない」（23%）が挙げられている。こうした調査結果から、幼児と児童、教員間の交流だけにとどまらない質の高い保幼小連携が求められていることが分かる。

これらを踏まえ、幼児期の教育と小学校教育の関係を「連続性・一貫性」で捉え、子どもの発達の連続性を踏まえた幼児教育を推進し、子ども一人ひとりの多様性へ配慮できる保育者（幼稚園教諭・保育士）が求められていると言えよう。

（3）小学校教育との接続

ところで、保育所や幼稚園から小学校へと移行するということは、子ども自身が主体的

に遊びながら成長・発達していくという遊び中心の学び方から、教科ごとの一斉授業を主とし学習・体得するという学び方へと変化することでもある。

昨今では、「小1プロブレム」と呼ばれる小学校低学年児の小学校への不適応が問題視されるようになって久しい。東京都教育委員会の定義によると、「第1学年児童の不適応状況」とは、「第1学年の学級において、入学後の落ち着かない、勝手に授業中に教室の中を立ち歩いたり教室から出ていったりするなど、授業規律が成立しない状態へと拡大し、こうした状態が数か月にわたって継続する状態」とされている。特に小学校始期となる4月～11月の間にその傾向が高まるという¹²⁾。そのため、保幼小連携や幼児教育と小学校教育の間の段差を小さくする取り組みに注目が集まるようになってきている。汐見によると『小1プロブレム』は、幼稚園や保育所で行ってきた活動的で主体的な学びのスタイルが減り、参加感のない、座らされているだけの授業に面白さを感じられない子どもたちからの違和感や抵抗感をあらわすメッセージだという¹³⁾。小学校1年生が学習指導に違和感や抵抗感を覚えているならば、なおのこと幼児期から児童期のつなぎ目を丁寧に見ていくことが重要になっていく。

前述した非認知能力の育成という観点においても、幼児期からの学習環境の一貫性が重要であり、様々な学習方法を取り入れた質の高い保幼小連携が求められている。小学校以降のカリキュラムとのつながりを意識し、乳幼児期から児童期にかけての子どもの発達の連続性を踏まえた幼児教育を推進していくことが課題とされているのである。

こうした幼児教育と小学校教育の接続の必要性から、小学校低学年において、児童の多様な学習形態を取り入れられる教科として「生活科」が存在する。次章では、幼児教育との活動のつながりを特徴とする小学校「生

活科」の内容に触れ、その特徴を整理する。

3. 小学校「生活科」について

(1) 小学校学習指導要領「生活科」の要点

1989年の小学校学習指導要領改訂では、知識や技能中心の学力観に偏らない新しい学習観（いわゆる「ゆとり教育」）が示された。この学力観の転換に合わせて「生活科」という教科が導入された。

「生活科」では、具体的な生活体験の中での学びを重視し、先生と児童が協力しながら課題に接近していく参加型の学習が取り入れられた。そこでは、子どもたちが「主体的に遊び・学ぶ」アクティブ・ラーニングの視点を持った単元を作っていくことが可能であり、就学前に育まれた興味や関心を途切れさせず、継続させていくことができる。

平成20年度改訂による小学校「生活科」の特質は、直接体験を重視した学習活動を行うこと、身の回りの地域や自分の生活に関する学習活動を行うことなどにある。また、新設当時から幼児教育との接続が重要な要素として位置付けられており、生活科が果たすべき役割には大きなものがある。

平成20年度の小学校学習指導要領生活科の改訂の趣旨には「小1プロブレムなど、学校生活への適応を図ることが難しい児童の実態があることを受け、幼児教育と小学校教育との具体的な連携を図ること」が含まれている。

こうした役割を踏まえ、生活科では以下の9つの内容を扱うこととなっており、児童の直接体験を含めた多様な学習方法を工夫することが可能となっている。

表1 生活科の内容
(小学校学習指導要領「生活科」内容より)

1	学校の施設の様子及び先生など学校生活を支えている人々や友達のこと分かり、楽しく安心して遊びや生活ができるようにするとともに、通学路の様子やその安全を守っている人々などに関心をもち、安全な登下校ができるようにする。
---	--

2	家庭生活を支えている家族のことや自分のできることなどについて考え、自分の役割を積極的に果たすとともに、規則正しく健康に気を付けて生活することができるようにする。
3	自分たちの生活は地域で生活したり働いたりしている人々や様々な場所とかかわっていることが分かり、それらに親しみや愛着をもち、人々と適切に接することや安全に生活することができるようにする。
4	公共物や公共施設を利用し、身の回りにはみんなが使うものがあることやそれを支えている人々がいることなどが分かり、それらを大切に、安全に気を付けて正しく利用することができるようにする。
5	身近な自然を観察したり、季節や地域の行事に関わる活動を行ったりなどして、四季の変化や季節によって生活の様子が変わることや気付き、自分たちの生活を工夫したり楽しんだりできるようにする。
6	身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりなどして、遊びや遊びに使う物を工夫してつくり、その面白さや自然の不思議さに気付き、みんなで遊びを楽しむことができるようにする。
7	動物を飼ったり植物を育てたりして、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもち、また、それらは生命をもっていることや成長していることに気付き、生き物への親しみをもち、大切にすることができるようにする。
8	自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を行い、身近な人々とかかわることの楽しさが分かり、進んで交流することができるようにする。
9	自分自身の成長を振り返り、多くの人々の支えにより自分が大きくなったこと、自分でできるようになったこと、役割が増えたことなどが分かり、これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちをもつとともに、これからの成長への願いをもって、意欲的に生活することができるようにする。

(2) 次期幼稚園教育要領における小学校「生活科」への期待

前述の幼児教育部会取りまとめでは、現行の幼稚園教育要領等の成果と課題をまとめた上で、幼児教育において育みたい資質・能力の3つの柱と、それに基づいた「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を整理している。

これらを踏まえ「小学校の各教科等においても、生活科を中心としたスタートカリキュラムの中で、合科的・関連的な指導や短時間での学習などを含む授業時間や指導の工夫、環境構成等の工夫を行う」として、生活科を中心に据えた、幼児教育と小学校教育の接続のイメージを示した(図1)。

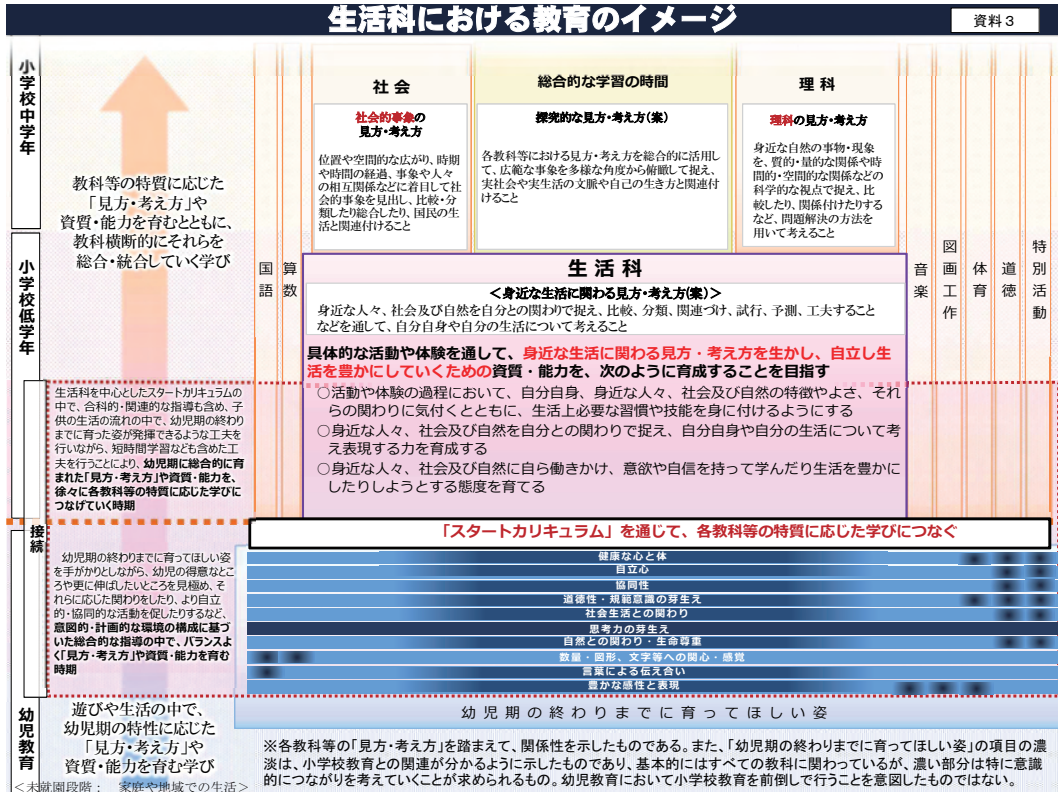


図1 生活科における教育のイメージ
(幼児教育部会における審議の取りまとめ資料3より)

ここでは、生活科を中心に据えたスタートカリキュラムとして、その前半を「意図的・計画的な環境の構成に基づいた総合的な指導の中で、バランスよく『見方・考え方』や資質・能力を育む時期」とし、後半を「幼児期に総合的に育まれた『見方・考え方』や資質・能力を、徐々に各教科等の特質に応じた学びにつなげていく時期」として位置付けているのが特徴である。

つまり生活科は、今後益々幼児教育と小学校教育の接続の核となり、保育5領域と共通の題材や教材・教具を用いた学習活動を計画していくことが期待されているのである。

そこで次章では、小学校「生活科」の内容と親和性が高いと考えられる保育領域「環境」について、その内容を整理する。

4. 保育領域「環境」について

保育領域「環境」は「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」という観点から子どもの育ちを捉えようとした領域である。「環境」を通して行う教育は、子どもに直接に働きかけるのではなく、経験させたい内容を環境の中に組み入れて、子どもの主体的な活動が生まれることを待つ、いわば「間接的に働きかける教育」¹⁴⁾であるといえる。

保育領域「環境」は、上記のねらいを踏まえ、以下の11の内容で構成されている(表2)。

表2 保育領域「環境」の内容
(幼稚園教育要領より)

1	自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議などに気付く。
2	生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。
3	季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
4	自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。
5	身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付く、いたわったり、大切にしたりする。
6	身近な物を大切に作る。
7	身近な物や遊具に興味をもってかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。
8	日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。
9	日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。
10	生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。
11	幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。

子どもは自分のからだ自分で操作できるようになるに従い、まわりのモノを自分でいじるようになる。「モノを試した結果の驚きは子どもに好奇心や関心という知的意欲を生み出し、それが次の行動へのエネルギーとなる。そうした自分の行為による変化から、子どもはモノの現象の道筋を発見するとともに、その行為の過程が子どもの内部に認識や思考のフレームをつくる。からだによる生活経験の重要性がここにあり、園での生活の諸場面が学びの場になっているのである」¹⁵⁾とされるように、モノとの対話を作り出す保育領域「環境」のねらいは、現在の子どもの学力の背景に隠れている大きな課題とも合致している。

身近な環境への興味・関心、関わりを育て、生活に取り入れようとする「心情、意欲、態度」を育てなければ、その後の学校教育で得られる知識や技能は子どもの生活を豊かにしていくものにはならない。それゆえ、子どもたちが周りの様々な環境にアプローチしていく保育領域「環境」の役割は大きい。

筆者らがこれまで取り組んできたICT (Information and Communication Technology : 情報通信技術、以下ICTと略す) も、子どもを取り巻く環境の1つであると捉えられ、子

どもの直接体験を促す有効なツールと成り得る。そこで次章では、幼児教育におけるICTの活用を軸にしながら、保育領域「環境」と小学校「生活科」の連携を目指した活動について検討していく。

5. 小学校「生活科」と保育領域「環境」の連携を目指したICTの活用

(1) 幼児教育におけるICT活用の方向性

近年の急速な情報化の進展により、多くの国民がコンピュータやスマートフォンを利用してインターネットを活用するようになり、AIやIoT、ビッグデータなどの技術革新により、我々の生活に質的な変化がもたらされている。今後、子どもたちが生活の中で様々な情報機器に触れる機会が益々増えていくことが予想される。

中央教育審議会教育課程企画特別部会「論点整理」(平成27年8月26日)¹⁶⁾では、急速に進化するICTなどの技術を使いこなす科学的素養を、全ての子どもたちに育んでいくことが重要であると指摘している。

これからの教育におけるICTの活用は、いかに学習活動の中でICTを活用するかもさることながら、いかに生活の中でICTとうまく付き合っていくかを、子どもたちが自然と身につけたり、考えたりできるようにしてはならない。

こうした社会の変化にともない、幼児教育の内容や方法についても新しい取り組みが導入されている。

保育現場においては、まずは保育者によるICTの活用を中心に検討がなされてきた。例えば、日々の記録については、保育中の子どもの姿を写真や動画などに残し可視化する「ドキュメンテーション」や、子どもの作品や成果を記録・保存していくポートフォリオなどが広まっている。これらを用いて、子ども一人ひとりの学びや成長の過程の記録を日頃から蓄積するとともに、その状況を保護者

と共有することを通じて、教育・保育施設と家庭が一体となって幼児と関わる取り組みが進められている。

子どもの活動におけるICTの活用については、映像素材などを見せることで、幼児の興味・関心を広げたり、対象への憧れを抱かせたりすることができるなど、ネオ・デジタルネイティブと呼ばれるこれからの時代を生きる子どもたちに適したICTの活用方法の研究が求められている。幼児教育部会取りまとめにおいても、ICTという用語での説明ではないものの、「視聴覚教材等については、幼児教育では、直接体験が重要であることを踏まえつつ、例えば、日頃の幼稚園生活では体験することが難しい体験を補完したりする場合や、幼児がより深く知りたいと思ったり、体験を深めたいと思ったりした場合の活用法を示すことを検討する」としている。ただし、幼児教育の特徴はもちろんのこと、健康面への影響など、様々な配慮が必要であることは事実である。津金¹⁷⁾は、「重要なことは幼児の実体験との関係を十分吟味しておくこと」とした上で、「そうした配慮の下での情報機器の利用は、まさにICTの『C』つまり『コミュニケーション』としての意味をもった幼児の心に響く体験として溜め込まれていくであろう」と述べ、幼児期にふさわしいICT活用の可能性とともに、その導入方法については、今後もさらに検討が必要であることを主張している。

これまで筆者らは、幼児教育におけるICT活用の在り方について実践を通して研究を行い、その要点として「子どもたちの直接体験を促進するためのICT活用」が必要であることをまとめてきた。

そこで、筆者らが行ってきた幼児教育におけるICTの活用事例を、小学校「生活科」と保育領域「環境」の視点でまとめなおすことを試みた。

(2) 小学校「生活科」と保育領域「環境」の連携を視野に入れたICTの活用

本節では、これまでの論旨を踏まえ、小学校「生活科」と保育領域「環境」の連携の視点から、ICTの活用実践を整理する。

①昆虫採集の記録

・活動内容：

子どもたちが野外で捕まえた虫や草花を、タブレット端末のカメラで撮影し、記録する。教室に帰ってきてからも、友達同士や先生と撮影した写真を見せ合って楽しむ様子が見られた。また、写真を振り返ることで、季節によって捕まえらるる虫や植物が変わっていき、自然と四季の移り変わりに気付くことができた。

虫取り名人や、虫博士などが誕生し、年間を通して活動を計画することができた。

・「環境」の内容：

(5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。

・「生活科」における位置づけ：

(7) 動物を飼ったり植物を育てたりして、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもち、また、それらは生命をもっていることや成長していることに気付き、生き物への親しみをもち、大切にすることができるようにする。



図2 「昆虫採集の記録」活動の様子

②お正月遊び

・活動内容：

3学期の初めに計画。アプリを使ったにらめっこを体験し、冬休み明けで久しぶりに会ったお友達や先生との緊張をほぐ

す。使用するアプリは、こどアプリシリーズの「だるまんぼ」。その後、コマ回し、羽根つき、福笑いなど、お正月に行われる伝統的な遊びを体験した。アプリの操作方法などを通じて、子ども同士でコミュニケーションをとる姿が見られた。

・「環境」の内容：

(3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。

・「生活科」における位置づけ：

(5) 身近な自然を観察したり、季節や地域の行事に関わる活動を行ったりなどして、四季の変化や季節によって生活の様子が変わることに関心し、自分たちの生活を工夫したり楽しくしたりできるようにする。



図3 「お正月遊び」活動の様子

③大好きなところ

・活動内容：

年長クラス、3学期に計画。幼稚園内をiPadを持って探索し、自分のお気に入りの場所や遊具などを撮影した。クラスに戻り、どんな写真を撮ってきたか、どうしてその写真を撮ったのかを発表した。子どもが撮影した写真は、印刷等をして卒園に向けたプレゼント等にも使用できる。

・「環境」の内容：

(10) 生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。

・「生活科」における位置づけ：

(8) 自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を行い、身近な人々とかかわることの楽しさが分かり、

進んで交流することができるようにする。



図4 「大好きなところ」活動の様子

上記のように、小学校「生活科」と保育領域「環境」の連携を視点に、ICTを活用した活動を整理することができた。次頁にその他の実践を整理し、一覧にしたものを表3として示す。

6. まとめ

本研究では、保幼小連携の観点から、小学校「生活科」と保育領域「環境」の内容に焦点を当て、その連携を目指したICTを活用した活動について検討した。

小学校「生活科」と保育領域「環境」は、その内容に親和性があり、幼児教育と小学校教育の接続を考える上で、重要な役割を担っている。

両者をつなぐ接点としてICTの活用により有用性があり、幼児教育と学校教育でともに使えるツールとして、タブレット端末の可能性を見出すことができた。

本研究で扱った事例は、幼稚園で実際に行った活動を扱ったものであるが、保幼小連携を考える上で、小学校の児童にも実践していくことが今後の課題である。

こうしたICTの活用を通して、子どもたちが生活の中でより良く情報社会に主体的に参画し創造していこうとする態度を育てていくように、今後も研究を継続していきたい。

表3 小学校「生活科」と保育領域「環境」の連携を視野に入れたICTの活用例

No.	タイトル	概要	「環境」 の内容	「生活科」 における 位置づけ
1	デジタル絵本の 読み聞かせ	先生が大型テレビで読み聞かせをしながら、園児は3～4人に1台のiPadを操作する。	(9)	(4)
2	タンگرامのアプリ	アプリを使って、繰り返しできるパズル遊びを楽しむ。	(8)	(6)
3	昆虫採集の記録	捕まえた虫や採集した草花を撮影して保存する。	(5)	(7)
4	セミの羽化の動画	セミの抜け殻を集めた後、セミの話をしながら視聴。	(5)	(7)
5	宇宙旅行	アプリを使って宇宙旅行に出かける。お気に入りの星を見つける。	(1)	(6)
6	なんでも ミュージシャン	アプリで演奏の擬似体験を行う。身近な物の中から楽器になりそうな物を探して楽しむ。	(2)	(6)
7	すいか割り	自作した電子書籍で読み聞かせを行う。その後、実際にすいか割りを行う。	(3)	(5)
8	安全教室	避難訓練の前後に、アプリで身近な危険や安全な行動について擬似体験する。	(10)	(1)
9	お正月あそび	アプリでにらめっこを行う。その後、こま回し、羽根つき、福笑いなど、お正月の伝統的な遊びを行う。	(3)	(5)
10	探し物	アプリで探し物を楽しむ。その後、部屋で宝探しをして遊ぶ。	(8)	(6)
11	ひらがな遊び	アプリを使ってひらがなのパズルやしりとり遊びを行う。	(9)	(4)
12	世界地図	パズル遊びをしながら、各国の国旗に親しむ。	(11)	(8)
13	作品撮影	作成途中の作品や完成した作品を写真に撮り、記録に収める。	(7)	(6)
14	カッコよく 技を決める	体操の時間に、技を決めているお友達の姿を撮影し、お互いに見合う。	(7)	(6)
15	大好きなところ	幼稚園の中を探検し、自分の好きな場所やお気に入りの物の写真を撮る。	(10)	(8)

謝辞

本研究をまとめるにあたり、文教大学大学院教授今田晃一先生には、研究の構想から論文執筆にいたるまで多大なるご協力を賜りました。また、研究協力園として、学校法人武藤学園大袋幼稚園園長竹村厚子先生、および同幼稚園教職員のみなさまに全面的なご協力をいただきました。記して深謝いたします。

引用文献

- 1) 文部科学省教育課程部会幼児教育部会「幼児教育部会における審議の取りまとめについて(報告)」(2016)
- 2) 村山大樹・今田晃一「幼児教育におけるデジタルの活用～幼稚園教育要領に基づいたアプリ分類の試行～」『教育研究ジャーナル』, 文教大学大学院教育学研究科, Vol. 7, No. 2, pp.19-22 (2015)
- 3) 村山大樹・今田晃一「大学生の模擬保育による幼児教育におけるICT活用のためのワークショップ型教員研修の在り方に関する研究」『教育研究所紀要』, 文教大学教育研究所, 第24号, pp.95-105 (2015)
- 4) 今田晃一・村山大樹「幼児教育におけるデジタルの可能性」『教育研究ジャーナル』文教大学大学院教育学研究科, Vol. 6, No. 1, pp.15-16 (2013)
- 5) 中央教育審議会「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について(答申)」(2005)
- 6) 池迫浩子・宮本晃司「家庭、学校、地域社会における社会情動的スキルの育成-国際的エビデンスのまとめと日本の教育実践・研究に対する示唆-」, p.10 (2015)
- 7) 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)」(2010)
- 8) 内閣府子ども・子育て本部「子ども・子育て支援新制度について」(2016)
- 9) 幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議「幼稚園教員の資質向上について-自ら学ぶ幼稚園教員のために(報告)」(2002)
- 10) 文部科学省「幼児教育振興アクションプログラム(平成18年度～22年度)」(2006)
- 11) 文部科学省「幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続に関するアンケート調査」(2009)
- 12) 東京都教育委員会「児童・生徒の不適応状況に関わる主な調査の結果について」『平成22年度 小学校第1学年の児童の適応状況調査』, 第3章, pp.53-76 (2012)
- 13) 汐見稔幸『本当は怖い小学一年生』, ポプラ新書, pp.24-26 (2013)
- 14) 小田豊『新 こどもと環境 理論編』, 太洋社, p.25 (2008)
- 15) 織田豊・湯川秀樹 編著『新保育ライブラリ 保育の内容・方法を知る 保育領域環境』, 北大路書房, pp.20-21 (2009)
- 16) 中央教育審議会教育課程企画特別部会「論点整理」(2015)
- 17) 津金美智子「幼児期にふさわしい生活とICT」『幼児教育』, 東洋館出版, p.103 (2015)